

大杉栄とロシア革命

滝沢 俣 一

はじめに

労働運動史なり、社会主義運動史なりを研究する目的は、現在にあつてはそれら運動の運動論的、組織論的課題の史的解明にあると言えよう。一連の反戦闘争、大学闘争の中で、我々は、旧来の組織論を否定し、将来社会の基礎としての生活レベルでの運動体の上向的な自立的発展の可能性を確認してきたが、いまだその発展における媒介の論理は未解決である。ブルジョア社会において、イデオロギー的にもブルジョアの日常生活を営む労働者は、日々の不満を日常的に表出するが、その不満の根本的解決が社会主義に見出される以上、媒介としての社会主義者の位置を不問に付することはできない。その媒介として従来組織論レベルで、ロシア革命以前（古典的帝国主義の時代）においてはドイツ社会民主党が、以後はボリシエヴィキが「理念型」とされてきたが、生活の場における運動体の論理を志向する我々は、こうした視点を欠落させたかか「理念

型」的発想を、根底的に再検討していかなければならない（ロシア革命の成功とドイツ革命の失敗を、両者の「前衛」の組織論の相違に見出す見解は、わが国でも福本和夫以来見られる）。

本稿ではそうした問題意識をもって、戦前のわが国の労働運動に一時多大な影響を与えた、大杉栄の運動論、組織論の、ロシア革命を契機とした発展の後をたどってみたい。大杉の運動論、組織論はロシア革命を契機に、まづ初期―ロシア革命までの幸徳の直接行動論を継承した本質論的な立場、中期―渡欧まで―の運動の高揚に左右された現実的な立場、それに後期―その死まで―のロシア革命を真にふまえた実体論的な立場というように三期に分れるが、以下、日本アナキズム運動の問題点とからめつつ、簡単に素描してみたい。

※大杉死後の運動に関しては、それまでに基本的な問題点は現われていると思われる。最近、小松隆二氏のすぐれた論文「日本におけるアナキズム運動の終焉」（『現代と思想』三三号）も出ているので省略した。なお、文中大杉栄の引用は現代思潮社版「大杉栄全集」よりおこなったが、いちいちページ数は示さなかつた。

一、革命受容の前提

一九〇六年六月、アメリカより幸徳秋水を乗せた「香港丸」は横浜に着港した。数日後神田錦輝館において帰国歓迎会が開かれたが、その席上、幸徳は「世界革命運動の潮流」なる大演説を行なった。日本アナキズム運動は実質的にはここから始まると言えよう。すなわちその演説において幸徳は従来の議會主義政策を否定する直接行動論を主張し始めたわけであるが、それは在米中にロシアの亡命革命家から学んだ、一九〇五年革命の成果としての労働者自立運動ともいべきものであった。すなわちこの直接行動論とは、一般に印象づけられているがごとき単なる暴力、テロルのことではなくして、議會政策の非を責め、革命の手段として、「ただ労働者全体が手を拱して何事をもなさざること、数日もしくは数週、もしくは数月なればすなわち足れり。しかして社会一切の生産交通機関の運動を停止せばすなわち足れり。換言すればいわゆる総同盟罷工を行なうにあるのみ(1)」という。ゼネラル・ストライキ論としての労働者運動論であったが、当時の状況下ではそうした意味よりも「心情的」に訴えるものが強く、たまたま起った足尾銅山の暴動を契機に、すでに二月に結成されていた社会党を中心とする社会主義者の間に急速に滲透していった。この背景として社会主義者には、前年九月の講和反対「日比谷焼打ち事件」や、三月の「電車賃値上げ反対運動」の際の大衆の行動の「革命的イメージ」があったろう。議會政策と直接行動をめぐって争われた翌年二月の第二回社会党大会においては、直接行動派は原案(折衷案)には破れはしたものの、

議會政策派を大きく抑えてその主流を占めるにいたった。

しかしながらこの直接行動論の意義が当時十分に理解されたわけではなく、後に問題を残すこととなった。簡単に言えば彼らの直接行動論への支持は理論的なものにとりよりも、急速なる資本制生産の確立とそれに伴う諸社会矛盾の顕在化、これに対する明治国家の強権政策、並びに議會政策派の日和見的態度への反発、焦燥という事実にも多分に負っていた。それ故その後の弾圧(社会党解散、赤旗事件)に直面するやより急進的となり、更なる弾圧、大逆事件を呼び起すこともなるのであった。

ともあれ幸徳の直接行動論は、その根底に持つ直接民主主義的発想の故に、明治社会主義が含んでいた社会主義⇕個人主義という対立の図式を超越し、「個人主義のアンティテーゼとしての社会主義は、個人主義に立脚する社会主義に転化(2)」したと言えようが、このことは後進資本主義国の社会主義運動にとつては飛躍的な発展を意味するものであった。封建的共同体の分解によって二重の意味で自由なる労働者を産出していくいわゆる資本の原蓄過程を徹底的には遂行しえず、先進国、特にイギリスにおいて確立された機械制大工業を輸入しつつ資本制生産様式を成立せしめた後進資本主義国(日本)は、農村に小農層を広範に残存させたま、むしろそれらを利用して自らの発展をはかっていった。それ故、市民社会の形成⇨個の確立をなすことなしに金融資本をもって資本主義化⇨帝国主義化していく後進資本主義国にとつては、人類の解放としての社会主義思想もそれをふまえた革命理論を必要とした。個の確立の問題と、いち早く矛盾を露呈した資本主義打破の問題とを同時に解決しなければならなかったのである。一九〇五年革命の影響を受けた幸徳の直接行動論はこの課題に応えるものを内包していたが、その

發展的展開は大杉栄に待たねばならなかった。

赤旗事件で二年六カ月の刑を受け、一九〇八年九月千葉監獄に服役した大杉は、ここで彼のアナキズム理論を再確立した。その成果は、一次『近代思想』に現われるが、代表作「生の拡充」にも見られるように彼のアナキズム理論は一種の自己権力論とも言うべきものである。「生」を「自我」「力」と捉え、それは「拡張」「活動」すべきものとして現実の「征服の事実」と衝突し、「征服の事実」に対する憎悪」となり、その「憎悪がさらに叛逆を生」じていくが、それは「また同時に人類の生の拡充」ともなるというものである。すなわちその過程は、「自我の活動」によって「生活意志と権力意志の最も強大なる」「最も多くの過去を解脱した」少数の、「個人的にまた社会的に、最も実り多きまた多かるべき、創造者」が、「大胆なる思想と行為とをもって」、「発意と実例と先導」をもって、「無為と懶惰」の多数者を揺り動かして、「現存社会の基礎を漸次に崩壊させ」、「旧社会の中に、新社会の要素を發展せしめ」、「最後の大闘争によって、その掘りくずしたる建物を一掃して、彼ら自身の中から創り出した社会を建設せんとする」（『生の創造』）というのである。

大杉のこの主張に対し「社会的解放の運動は個人の解放の運動と文字どおり二重うつしであられる」という非難もあるが、この点こそ反対に幸徳の直接行動論を継承し發展させた大杉のすぐれた点であろう。むしろ問題はそのことにあるのではなくして、こうした運動を推し進めるべき組織運動論上の欠陥にこそあるのではないだろうか。

それはともかく、大杉の「その掘りくずしたる建物を一掃して、

彼ら自身の中から創り出した社会を建設せんとする」というのは、「伝習的国家なるものを一掃し去って、労働者の組織をもってそれに代らしめんとする」ことであり、この社会革命は「労働者自身にこの準備ができた時、すなわちみずから社会を経営し得ると感じた時、始めて」（同）可能となるものであったが、こうした大杉が主体として労働者を見出した時『近代思想』は「知識の手淫」と見え始め、待望の労働運動へと進んでいくのだった。

「知識の手淫」であった『近代思想』を廃刊し、「労働者を相手」とした『平民新聞』を一九一四年一〇月創刊したものの、その『平民新聞』はほぼ毎号発禁という弾圧に会い、翌年三月には廃刊せざるを得なくなった。その後一〇月に再び『近代思想』を復刊するが、『平民新聞』的色彩を多分に持ったこの二次『近代思想』は、二号、三号、四号と発禁処分を受け、一六年一月にはこれまた廃刊のやむなきに至った。またこの頃開いていた「サンジカリズム研究会」（後に「平民講演会」となる）も内輪の域を脱するものではなく、運動の低迷さは蔽うべくもなかった。こうした中で女性問題もからみ、大杉は年来の同志と離れていった。

かくて労働運動へ進まんとした大杉の目的は、極めて不十分にしか果せなかったが、従来余り高く評価されていないこの時期に、『近代思想』で確立された「生の哲学」は労働運動論による肉づけを施され、当時の社会主義者達（思想的に第二インター系）を大きく乗り越えて、後の活動の十全な準備を整えることとなった。

「われわれは労働者である。自己および自己の社会的地位を自覚せる労働者である」と宣言した『平民新聞』は、「この確固たる自覚をわれわれの仲間の労働者の間に呼び起す手引と」して、労働

者の地位「奴隸的地位の改善」と、「この改善をさまたげる」ところの「ただ資本家階級の防護のために存在する」「いっさいの社会的制度に対する階級戦争の叛逆」(労働者の自覚)を行うことを訴えた。大杉はこの労働者の奴隸的地位からの解放という問題を単なる「社会的知識」として主張したのではない。大杉のこの主張の背後には次のような事実、すなわち赤旗事件の「獄中におけるこれら(ロシア文学一引用考)の影響と、およびその以前から続いていたサンジカリズムの研究とによって、労働者の有する強烈なる生活本能と反抗本能、およびそれらの本能の行為となつて現れた結果の、偉大なる個人的および社会的創造力に打たれた」(労働運動と個人主義)という事実があった。彼は、「労働者の悲惨な生活に対する憐愍とか同情とかではなく、かえつてその生活の中にある偉大なる力を見出して、その力を讚美し、またみづからもその力の中に同化してしまいたいと感ずるようになった」のであり、「そしてまた、労働者のこの力を感じてはじめて、さきに言つた経済的進化の傾向とか、労働者が新社会の中堅となるとかという知識が、本当に僕(大杉引用考)の全身の中に活躍してきた」(同)と云うのである。

こうした確信に支えられて、『平民新聞』一号においてはシュトゥットガルト大会の決議を投げすてた第二インターの裏切りを非難するとともに、「戦争に対する戦争」なるスローガンを公然と提起することによつて、この第二インターを左から乗り越えてしまったのである。この大杉の姿勢が当時の日本の社会主義者片山や堺を圧倒的に抜き出していたことは確かである(5)。この頃大杉はクロボトキンが愛国主義に転じたというニュースを知ったが別に動揺した様子はない。すでに彼は獄中におけるアナキズム理論の再構成を通して

思想的自立を克ち取つていたのであつて、「戦争に対する戦争」として一九一七年三月に勃発したロシア革命を、実践的に受け入れる準備は整えられていたのである。

二、ロシア革命から日本革命へ

「二月革命をもっとも敏感に理解したのは、いうまでもなく一九〇五年の革命の洗礼(もちろん精神的なものではあつたが)をうけた少数の社会主義者たちであつた」(4)彼らは五月七日に山崎今朝弥宅でメーデー小集会を催し、そこでロシア革命を支持する決議文を作成した。それはまづ「ロシア革命に対し深甚なる同情を寄せ」、その歴史的意義を明らかにするとともに、これに対するロシア社会主義者ならびに各国の社会主義者の責任を力説し、戦争の終結を訴えるというもので、ロシアはじめ各国の革命団体に送られた。この決議文はロシア革命の質をかなりよく理解しており、帝国主義戦争継続を声明していたケレンスキイ政権に反対し、即時戦争停止と平和と呼びかけていたことが特に注目される。その後まもなく十一月に、「レーニン、トロツキーのボリシェヴィキ革命」が起つた。

当時は社会主義者といえどもロシアの事情には余り詳しくなく、今では笑い話と聞えるだろうが、山川均でさえ、かつてシュトゥットガルト大会の議事録を見たことがあつたので、「どうもレーニンとどういふような名があつたな」といふので、また調べて見た(5)という程度であり、知識人一般においても、「わずかに京都大学の米田庄太郎ただ一人が、それもレーニンのロシアにおける農村分析に関する著作を読んだ記憶から、『農業学者だろう』という知識をもつていたといふ(6)」。そんな程度でしかなかった。この頃はすでに新聞

の外電は、かなり早く日本に伝えられるようになっていたので、当時の人々は誰もこの記事を通して始めてロシアの事情を明らかにしていくのであったが、こうして新聞によって知るロシア革命の経過は社会主義者達の心を大きく捉えずにはおかなかった。

山川氏によれば「大杉栄も最初はロシア革命支持」であったという。「その当時の社会主義的な思想を持っていた者で、影響を受けなかった人はない(7)」という程、ロシア革命の影響は大きかったのである。大杉がこのロシア革命の勃発に際していかなる衝撃を受けたかを伝える資料は現在まだないが、山川氏の『自伝』からも、後の「僕等自身もこの非常に鼓舞され影響されたものの一人だ」(『無政府主義者の見たロシア革命』自序)という大杉の言葉からも、彼が大きな感動を持ってこの革命を迎えたと推察してもよいであろう。

山崎宅のメーデー小集会では、山川均、吉川守邦、高島素之からロシア革命の報告があったが、ロシア革命について最も詳しくかったのは高島であった。大杉のロシア革命についての発言の記録は、その後の一九一八年四月の「ロシア革命記念会」におけるものが最初であるが、彼はそこでひとくさりロシア革命の批評をやった後で、「過激派の戦術はアナキズムの戦術だ」と言って、高島に「しかし独裁はちがうだろう」とからまれている。

この時分は社会主義者の間では、まさにロシア革命支持一色であったが、まだ一般への影響は見られない。この点は従来しばしば誤り解せられているところであるが、ロシア革命の意義はまだ労働者の間でさえ正当には評価されていなかったのである。(現在こうした事実が、友愛会の機関紙『労働及産業』の懸賞論文を分析した渡辺徹氏によって明らかにされている)(8)。労働者の中に革命の影響

が現れるのはもっと後の、一九二〇〜二二年頃であったろう。したがって一八年の米騒動にも社会主義思想の影響はほとんど見られない。米騒動はロシア革命と並んで日本の支配者階級を震撼せしめたものではあったが、その一揆的性格は脱しがたく、社会主義者達もただ事態を見守るばかりであった。(大杉は大阪で米騒動に遭遇したが、「野次馬」出身を誇る彼も、「野次馬」にさえ加わらなかつたという)(9)。が、このような気運は、社会主義者達を鼓舞せずには家おかなかつたのである。

大杉は『文明批評』一号「僕等の自負」で、「われわれは今資本文明の頽廢期に立っている。新しい社会的憧憬がわれわれ自身の内から燃えあがって来る。外からもやはり焰のような同じ霧囲気がわれわれに捉迫してくる」と述べているが、この「外からもやはり焰のような同じ霧囲気」とは、ロシア革命のことである。このロシア革命や米騒動に強い衝撃を受けた社会主義者達は、それぞれ実践的活動へと進んでいった。前記の『文明批評』を一九一八年一月に創刊した大杉は、三月にそれを廢刊にし、より自らを表現することが可能な、それ故労働者の中へと喰い込んでいきうものとしての『労働新聞』を四月から出し始めた。又一月頃からは労働者との交流をめざして「労働問題座談会」にも出席し始めた。こうした動きは従来の自己の組織論を本質的な立場より現実的に一歩進めたことであるが、組織実体的な究明をふまえているわけではなかつた。このことを大杉は労働者町、亀戸転居にからませて、すなおに「小紳士の感情」で述べている。

「従来僕は、小官吏や小番頭なぞという中流階級の逃げ場所である静かな郊外に、隠遁者のような生活ばかり送ってきた。そしてそ

こから、時々、われわれ平民労働者はなぞというあくびのような声を世間に吐いていた。しかし「僕等自身を平民労働者として考えた僕等は、何よりも先づ、僕等自身の中のこの小紳士的分子を遂い退けなくちゃならん。小紳士的感情を減尽しなくちゃならん。そのためには、やはりまづ、僕等と小紳士の生活をすてなくちゃならん。できるだけ僕等自身の生活を平民労働者のにし、かつできるだけ平民労働者の実生活に接近しなくちゃならん。そして僕等自身の中に平民労働者との一体的感情を養わなくちゃならん」。

またこの時分に、大杉を中心とするいわゆる「大陽系」が形成されたのはあるが、それが「生の哲学」を本質論的にふまえた実体論的解決でないことは前述のとおりで、むしろそれは流動化する情勢への「つぎ木」として機能するものであった。この「一次集団」的结合は、ある面では強固な結束をはかれるという利点を持つが、往々それ自身で自己完結し、発展的他者活動において決定的弱点を示すという限界を孕んでいた。「集団の組み方を中心人物の『氣質』に依拠するという日本の伝統的な組織論によっていた⁽¹⁰⁾」が故に、展開される運動の質も中心人物によって大きく左右されるという「共同体」的性格を持っていたが、このことは運動の高揚期には中心人物大杉の魅力もあって運動にプラスした。たて続く発禁処分の弾圧で「労働新聞」は四号で廃刊（一八年七月）となるが、翌年からは大杉達はより一層活発な活動を展開していく。

米騒動に「非常な脅威、非常な恐怖」を感じた政府は、それまでの弾圧政策を一定程度緩和し始めたが、これにより最も勢力を得たのが、吉野作造らの民本主義運動と鈴木文治らの友愛会の運動であった。大杉は民本主義者に対してはほぼ山川の批判と同じような論

調で、『文明批評』等においてその欺瞞性を暴露していったが、また友愛会の協調主義者に対しては、一九年一〇月から創刊した『労働運動』で鋭く批判を加えていった。この頃盛んに行なわれた「演説会もらい」もこの協調主義批判の一環であった。この「演説会もらい」は大杉の「革命的ロマンティズム」を窺わせる。「新秩序の創造」で大杉は、演説会における友愛会系の弁士や立合の警察官の犯罪性を訴えるように述べている。「僕等は今の音頭取りだけが嫌いなんじゃない。今のその犬だけが厭なのじゃない。音頭取りその者、犬その者が厭なんだ。そしていっさいそんなものはなしにみんなが勝手に踊って行きたいんだ。そしてみんなその勝手が、ひとりだけで、うまく調和するようになりたいんだ」と。

渡辺政太郎方の「研究会」と、「労働問題座談会」が渡辺の死後に合併し、渡辺の号をとって「北風会」（九月に改名されて「東京労働運動同盟会」となる）という名で、この「演説会もらい」の主役として、「労働運動の闘士養成所」として発展していった。また独自の労働者集会の組織化も東京、横浜、大阪等で盛んに行なわれていくようになった。

労働争議それ自身は大戦の影響もあって早く一九一七年頃から急速に拡大していったが（一六年の争議件数一〇八件、参加人員八四一三名に対し、一七年は三九八件、五七三〇九名と一挙に増大し、これ以後もこの水準を保つ）、戦間的なサンジカリズムの運動は、この盛んな労働争議の中でしだいに労働者を捉えるにいった。また一九年一〇月の国際労働会議労働代表選出問題も、労働者の左傾化をもたらしたものの一つであった。こうした労働運動の高揚する中で、一九二〇年五月一日、上野両大師前で日本における最初の

メーデーが開催された。

このメーデーが契機となり、全国的労働組合の連盟として「労働組合同盟会」が結成された。これには友愛会のほか、印刷工組合の信友会、正進会、海軍工廠の工人会、工友会、教員組合の啓明会、交通労働組合、日本機械技工組合、紡績労働組合等が参加した⁽¹⁾。そしてこの連合の気運は全国的にとたかまり、また友愛会内部にもサンジカリズムの影響を色濃くしていた。三月からの戦後経済恐慌がこうした動きに拍車をかけたことは疑いない。翌二年には友愛会幹部のシベリア出兵や足尾争議等の問題に関しての協調主義的態度に対し、同盟会内部から「知識階級指導者排斥運動」がおこったりして、友愛会は同盟会から脱退してしまうもの、こうした労働組合の連合の動きは社会主義者達にも滲透し始めていた。それは一方では日本社会主義同盟の結成となって現われたが、他方では大杉の活動に強く見られた。

「日本での運動の困難を」打開すべく、「支那の同志との連絡を新しくする」(「日本脱出記」)必要を感じていた大杉は、「極東社会主義者会議」に出席するため、危険を冒して上海に密航した。この上海の会議でコミンテルン代表チエレンの官僚主義的な態度に反発しつつも、二千元の運動資金を得て帰国するや、アナ・ボル共同戦線、二次『労働運動』を創刊した。秋山清氏は、多くのアナキストがポリシエヴィキを全的に否定しつつあった時、大杉がすすんでアナ・ボル共同戦線を考えてそれを実践しようとしたことを高く評価して、そうした大杉の目的として次の二点をあげている。「一つには、日本の状況が、まだ民衆が無自覚に天皇下の資本主義に搾取されて目覚めないときに、その前衛である各派の社会主義者が前衛の

みの派閥争いに終始すべきではないと考えたこと」、「いま一つは、それによってロシア革命の実際とボルシエヴィキそのものをより確かに知ろうとつとめたこと⁽⁹⁾」である。ほぼこの通りであろう。しかし、大杉がこの時、大衆的な運動体と、その媒介、社会主義者の「役割」との区別と連関を理論的にふまえていたかどうかは疑わしい。が、何よりもこの背後には「日本革命近し」という大杉の情勢判断があったのだろう。

彼は二次『労働運動』の第一号一面にかかげた「日本の運命」と題する評論で、「日本は今、シベリアから、朝鮮から、支那から一刻分裂を迫られている」、「日本のこの分裂は、純粹の労働運動や社会主義運動の進行如何にかかわらず、必ずここ一年もしくは二年後に、その絶頂に達する。僕等はもうぼんやりしていることはできない、というのをそこだ。僕等労働運動者や社会主義運動者は、この分裂に対してどんな態度をとるべきであろうか。／僕等は僕等で、僕等だけの欲する分裂に、まっしぐらに進むべきであろうか。それとも、多少は好ましくない、しかし眼の前に起っているところの、この分裂に与かるべきだろうか。／僕等の態度は『その時』になつてきめていい。けれども、今から心がけていなければならぬのは、前にも言った、いつでも起つ準備がなければならぬことだ」と述べている。

こうして大杉の共同戦線は、現実的情勢に支えられたものであったが、この頃からロシア革命の経過もよく知られるようになり、ポリシエヴィキの党派性はしだいに強く現れ、日本ボル派の裏切り(近藤栄の上海派遣等)や、社会主義同盟の解散、労働組合同盟会の分裂等によって、共同戦線には終止符が打たれ、「伊井敬の『ボ

リシエヴィズム研究」が載せられているかと思うと、『労農政府を倒せ』という論文も書かれている(13)二次『労働運動』は、六月に第一三号で廃刊となった。ここにいわゆるアナ・ボル論争が開始されることになるのである。

三、ポリシエヴィキ批判

「ボルシエヴィキ政府に対する批評」僕はそれを随分長い間遠慮していた。僕ばかりではない。世界の無政府主義者の大半はそうだった。また、革命の最初にはみずから進んで共產主義者等の協同戦線に立ったものも少なくはなかった。ロシアの無政府主義者等は、ほとんど皆そうだと言つてよからう。

ロシア以外の国での無政府主義者は、一つにはロシアの真相がよくわからなかった。そしてもう一つには、実際反革命がいやだった。そして彼等は十分な同情をもつて、ロシア革命の進行を見ていたのだ。

が真相はだんだんに知れてきた。労農政府すなわち労働者と農民との政府それ自身が、革命の進行を妨げるもつとも有力な革命的要素であることすらがわかった。

ロシアの革命は誰でも助ける。がそんなボルシエヴィキ政府を誰が助けるもんか。(「生死生に答える」)

十二月から三次『労働運動』を創刊した大杉は、その紙面でポリシエヴィキ批判を始めた。大杉のポリシエヴィキ批判は、「ロシアの真相がよくわからなかった」という事情からも、彼の思想からも必然なように、日本の労働者に対しロシアにおけるアナキスト弾圧の事実を訴えることから始められた。それではロシアの現実はどう

であつたらうか。

十九世紀後半の「三つの大きな新しい事情」、すなわち、農奴解放による「自由な」労働市場の確立、外国(主としてフランス)からの借款による鉄道建設、それに外国資本による大規模な繊維工業の確立によって、国内に旧来の共同体を広範に残存させながらも、資本制生産様式を確立、発展せしめた後進国ロシアは、内部に抱えたその矛盾を国外に向けて解決せんとしたもの、かえつてその第一次大戦による疲弊は著しく、自らの矛盾をより一層激化させ、遂にロシア革命を勃発させた。だがこの時成立したソヴィエト権力は、組織性に勝るポリシエヴィキの手に握られることとなり、緊急に解決されるべき様々な課題には、ポリシエヴィキ的政策が施されることとなつたが、それら諸政策は困難な情勢の中において極めて現実主義的となり、更により多くの問題を累積していった。こうしてこれら諸政策は新たな現実によって修正を迫られることとなり、その方針は右へ左へと大きく転換をよぎなくされた。またそれに対する反対派の活動は「社会主義建設を妨害」するものとして徹底的に弾圧され、それに見合つて中央集権制も強固に打ち固められていった。

すなわちいわゆる「息つき」の必要から締結されたブレスト・リトフスクの講和条約は、チエコ軍団の反乱に始まる干渉戦争―国内戦によつて、その「幻想性」を暴露されることとなつたが、その時譲り渡された領土と人口の四分の一、鉄と石炭の四分の三、重要な穀物倉ウクライナは、折からの経済危機、食糧危機、食糧危機に拍車をかけた。この事態に対しソヴィエト政府は、「農民革命の中心部で、共同体により土地総割替が行なわれ、いわゆる『中農化』が

進行したその地点をさして、富農対極貧農の図式」を適用し、「武力による穀物徴発をすすめることとなった(14)」。この戦時共産主義政策は生産力を激減させ、経済危機、食糧危機は更に進行していくのだった。

経済復興政策は、経済統制の強化として、「ブルジョワ専門家の高給での雇傭、企業内での管理者の独裁的権限、鉄の労働規律」の擁護、「出来高払い制やテラー・システム」の採用となっており、労働者、農民の不満を高める一方となり、彼らを緑軍や白軍に進んで参加させていった。それにもかかわらず、政策転換を要求した反対派やアナキストを弾圧することで逃げのびんとしたボリシェヴィキ政府は、より大きな反乱、クロンシュタットやマフノ運動を呼び起すこととなった。経済の再建をめざして採用されたネツプも、社会主義経済建設とはほど遠く、こうしてロシアは歪曲された道を歩み始めていった。

大杉のボリシェヴィキ批判は、「俺はどっちが本当かは知らない。知っているのはただ資本家の政府だろうが、労働者の政府だろうが、とにかく政府という奴の、ことにその警察という奴の、まるで信用のできないということだ」(「どっちが本当か」というように、革命家の直観とでもいうものに多分に依拠したものであったが、彼はそうした直観を跳躍台に批判を進めていった。大杉はまずボリシェヴィキ批判を、前述のようにソヴィエト政府のアナキストに対する弾圧の事実を訴えることから始めたが、それを三次『労働運動』紙上において二二年八月の六号頃まで盛んに掲載した。その記事は主としてヨーロッパの無政府主義者の新聞の翻訳からなっていたが、これに対する日本のボル派の反応はソヴィエトの「神話」

の対置以上ではなかった。大杉のロシア革命に対する本格的な論評は、全国労働組合総連合の問題とも関連して九月の七号から現れた。

大杉がボリシェヴィキ批判をソヴィエト政府のアナキスト弾圧から始めたのは正当であったが、批判をより進めていくには、その弾圧の背後にある問題点を明らかにし、同時に自らの革命論の構築を推し進めていかなければならなかった。大杉の批判は九月の七号から本格化するのだが、その内容はどうであったか。大杉が鋭く指摘した問題は次の四点である。共同戦線の問題、プロレタリア独裁¹¹過渡期の問題、それに新経済政策と労働組合破壊である。

「なぜ進行中の革命を擁護しないのか―生生死に答える」では前の二つの問題を扱っているが、共同戦線の問題は総連合問題とも関連するので後にして、過渡期に関する問題から始めよう。大沢正道氏も述べているように、ここでの「プロレタリア独裁論」についての大杉の返答はきわめて大雑把で、しかも不十分である(15)。大杉は過渡期の存在を、「無政府主義者の敵が考え出した詭弁だ」と言って、「とにかく僕は無政府主義の即時実現を信ずるものである」と断定しているが、次の八号では少し前進して「労働者は、旧制度の下におけるよりもっと苛酷な労働条件の下に、さらに建設の事業に従わなければならない」(「労働ロシアの労働組合破壊」として、「労働者が革命の一切事を決行する」という自主自治の「自由ソヴィエト」による「無産者の独裁にも、決して反対するものでないこと」(「独裁と革命」)を告げて、ボリシェヴィキ政府の無産者独裁なるものが、労働者不在の独裁であることを非難するに至っている。このように彼はソヴィエトの意義を強く認めてはいるが、「資本主義社会

にかわるべきあたらしい社会体制について」「政治的には連合主義、経済的には共産主義」という漠然とした規定しかあたえてはおらず(16)、この弱点は決定的なものであった。彼がこの頃バクーニンの研究を始めたのもこの点を明確にするためであつたらう。

次は新経済政策の問題であるが、大杉はこのネップを特に疑問視して、「ボルシェヴィキ革命は、少なくともその新経済政策以来の進行は、果して労働者自身の革命と言えるだろうか」(「労働ロシアの労働組合破壊」と自問し、「労働ロシアの最近労働事情」においてはベルクマンの論文を引用しつつ、ネップを「国家資本主義への後戻り」として、「全然共産主義の失敗でその資本主義への降伏」であると)、その労働条件の悪化、長時間労働、低賃金を批判している。そしてこのような不利益―勿論これはネップ以前から、すなわち一八年頃から始まるのだが―に反対すべき労働団体が、政府の一機関である労働委員によって支配されている現実を、「労働階級は生産や産業の管理権を奪われて行つた」現実を、続く「労働ロシアの労働組合破壊」で批判するのだった。

このボルシェヴィキ政府の労働組合破壊と、それに反対する労働反対派の活動の紹介を大杉はひととき熱心にやっているが、この労働反対派も、一九二一年の第一〇回党大会でレーニンによつて、「ブチブルジョア・アナルコサンジカリスト的偏向」として弾圧されてしまった。

大杉のボルシェヴィキ批判は遠いロシアの批判だけではなかつた。彼は、ロシア革命の波の高揚する中で進んでアナ・ボル共同戦線を組んだように、ボルシェヴィキ批判も日本の運動―個えば総連合問題―とからめて提起していくというように、極めて実践的に展

開した。この総連合問題と関連するものが先ほどの共同戦線論であるが、彼は次のように述べている。「協同の敵、すなわち一言にして資本家制度と闘う時には、僕は労資協調論者から個人主義的無政府主義者に至るあらゆるものとの協同をあえて辞せない。ただ僕がその間に保留しておきたいのは、僕の批評の自由である。互いに協定した戦線の内外における、僕の行動の自由である。それが許されさえすれば、僕はどんないやな奴とでも、協同の戦線に立つことぐらいはがまんする。」(「生れ生で答える」)この文が「トロッキーの協同戦線論」への批判として書かれていることは自明であろう。

総連合大会は一九二二年九月に大阪で開かれたが、中央集権Ⅱ合同を主張する総同盟側(友愛会が前年一〇月に日本労働総同盟と名称変更)が、右派(鈴木文治系の松岡駒吉や西尾末広等)とボル派の共同戦線で、自由連合Ⅱ連合を主張する組合同盟会側(サンジカリスト系)と、意識的に衝突して決裂してしまつた。大杉によれば自由連合論とは「破壊と建設とを同時にやろうという」ものであり、「理論としてはまだ成長していない。しかし現実の強い気分の上に、腹の虫の上にしつかりと突つたて行こうとしている」(「労働運動の理想主義的現実主義」)ものであるというが、このような理論不足はいわゆる「白紙主義」とも関連して、後の運動の致命的弱点となつていった。

一九二二年の暮、「一月の末から二月の初めにかけて、ベルリンで国際無政府主義大会を開くことになつたが、ぜひやつて来ないか、という、その準備委員コロメルの招待状」(「日本脱出記」)を受けつた大杉は、大会に出席するため、早速出発の準備にかかつた。この大杉のヨーロッパ行きには二つの目的があつた。一つはロシア

革命の事情を詳しく知ること、特に多くのアナキストによってもアナキズム運動とは認められなかったマフノ運動を研究することであり、「この運動の研究こそ、ロシア革命が僕等に与えることのできる、一番大きな教訓をもたらすものじゃあるまいかと思つた」(同)大杉は、ドイツに潜行せんとして果せず、マフノの相棒ヴォーリンには会えなかつたが、フランス滞在中にこの問題の材料をかき集め、帰国後、『改造』一九二三年九月号に「無政府主義將軍」としてその成果を発表した。そこで大杉は、「どの党派も、みな、民衆の運動を自分の党派の狭い規律の中におしこめて、民衆の革命的精神とその直接行動とを絞め殺そうとする」が、マフノ運動はそういうものではなく、「ウクライナの民衆の本能的自衛にもとづく革命的一揆運動がマフノを駆り出したのにすぎ」ず、「マフノピチナとは、要するに、ロシア革命を僕等のいう本当の意味の社会革命に導こうとした、ウクライナの農民の本能的な運動である」と述べている。

だが重要な点は、大杉の在仏中の見聞やマフノ運動等を通したロシア革命の研究が、彼の革命論の弱点を克服する方向を示し始めたということである。この論文の最後では次のように指摘している。「ナバトの大会は、無政府主義的傾向の革命から無政府主義社会に到るまでには、多少の年月のかかることを肯定している。そしてこの過失と誤謬と不断の完成との時代を、過渡時代という権力的意味の言葉で言い現わすことを避けて、非権力的経験の蓄積時代とか、あるいは社会革命を深めて行く時代とか呼ぶことに決議している。大衆のこの不断の完成を助けることが無政府主義者の任務なのだ」と。ここでは過渡期の問題とともに、大杉の従来のぼんやりし

た考え—社会主義者の「役割」の問題が、次に述べるヨーロッパ行きの目的のいま一つと関連して明確化してきていることが認められる。

大杉のヨーロッパ行きの目的のいま一つとは、こうした任務を担うアナキストの組織結成のためであった。彼は上海やパリで、『日本脱出記』でもらした「極東無政府主義者の組織」の結成に奔走していたが、日本に送還されてからは日本の組織の強化に全力をあげて努めた。近藤憲二氏の回想によれば、帰国後「信友会、正進会、機械労働組合、芝浦労働組合などの有志の集まりに、大杉も私も行くので、ゆつくり話を聞くときはなかつたのである。まったく彼は帰るとすぐ労働組合の集會に大わらわな熱を見せていた」そうである。こうした大衆的組織化と同時に、従来現実的レベルであいまいにされた組織論の転換をはかり、アナキストの組織の実体論的構築を推し進めた。彼は「自由連合派の連中の一つの団結」をつくらうと、その準備の集會を開いたりしたが、その「集まりには、自連派の各思想団体、労働団体、各地方の有志たち(17)」が参加し、当時「Aの同盟」と仮に呼ばれ、「もしそれが成立したならば、当然、非合法の秘密結社になつた(18)」ということである。この会合はうまく進行せず、そうこうしているうちに関東大震災となり立ち消えとなつてしまった。そしてこの震災のどさくさの中で、九月一日、大杉は虐殺された。

こうして大杉はこれからの運動のヴィジョンを描き始めた時、権力によって殺害されてしまうわけであるが、この後、運動は衰退の一途をたどるのみとなつた。個人の解放の運動が同時に社会的解放の運動となつていくという、明治社会主義が最後に残した問題意識

を正しく受け継ぎながらも、同時に受け継いだ心情性は、理論化の媒介となることなく理論蔑視となり、この問題意識を更に発展させ、理論構築を目指すものにはやいかなかった。明治の社会主義者幸徳はアメリカに行くことよってロシアの革命家から学んだが、大正の社会主義者大杉はフランスに行くことよってロシア革命から学んだ（ちなみに大杉は今一度ヨーロッパへ行きたいと言っていたという）。帰国後、幸徳を待っていたものは理論の紹介であったが、大杉を待っていたのは理論の実践であった。ここに両者の時代の差が見られる。が、後進的な、それ故一層多く矛盾を含んだ日本の国家権力にとって、どちらをも許すところではなかったのである。

おわりに

以上、大正期の日本アナキズム運動と大杉栄の運動論・組織論の

大杉栄・伊藤野枝追悼講演会

講演者 瀬戸内晴美・大沢正道・鈴木清順

日時 9月16日（土）午後6時より

場所 山手教会（渋谷駅ハチ公口下車）

主催 9.16 大杉栄・伊藤野枝追悼講演会実行委員会

連絡先 豊島区南池袋一ノ五ノ二一 田中ビル207

麦社気付 電話 987-5765

発展を概観してきたわけであるが、これによって次のような事実が明白になったであろう。日本の資本主義が「かけあし」で進まなければならなかったように、日本のアナキズム運動も「かけあし」で進んでいったが、そこに多くの問題点が積み重なっていったということと、大杉の運動論・組織論がそうした問題点を克服する方向に進みつつあったということである。前者の点をふまえてつづ後者を発展させていくことが、とりわけ一連の大学闘争の成果と敗北の確認とともに我々にとって必要であろう。生活次元における運動体の上向的發展を志向する我々にとって媒介としての社会主義者の位置、革命運動におけるその実体的な解明が今後の課題である。

(1) 幸徳秋水「世界革命運動の潮流」(「光」第一六号、一九〇六年七月)
 (2) 三谷太一郎「大正社会主義者の政治観」(「日本政治学会編 日本社会主義」P七)

九)

- (3) 飛鳥井雅道「ロシア革命と大杉栄」(「現代の理論」一九六七年一〇月号) 参照
 (4) 山辺健太郎、竹村英輔「十月革命が日本におよぼした影響」(「前衛」二九五七年一二月号P二二八)
 (5) 山川均「山川均自伝」P三六九
 (6) 篠原光行「ロシア革命と日本労働者階級」(「唯物史観」五号P四六)
 (7) 山川、前掲、P三七〇
 (8) 渡辺徹「ロシア革命と日本労働運動」(「前掲 現代の理論」) 参照
 (9) 大沢正道「大杉栄研究」参照
 (10) 松田道雄編現代日本思想大系「アナキズム」P五六
 (11) 萩原晋太郎「日本アナキズム労働運動史」参照
 (12) 秋山清「ロシア革命と大杉栄」(「思想」一九六四年一号P一一〇)
 (13) 近藤憲二「私の見た日本アナキズム運動史」P四二
 (14) 和田春樹「ロシア革命」(岩波講座「世界歴史」二四、P四二〇)
 (15) 大沢、前掲書、P三一一
 (16) 大沢「アナキズム思想史」P二二八
 (17) 近藤「無政府主義者の回想」P二五五
 (18) 大沢、前掲「研究」P三八四